

目次

- ・ 1997年度 第2回例会報告
市川清流の生涯（後藤純郎）
馬場俊明「集書院の落成時期についての一考察」をめぐって
（山口源治郎）
- ・ 事務局からのお知らせ
- ・ 研究例会・運営委員会のお知らせ

1997年度 第2回例会報告（1997年12月21日 法政大学）

市川清流の生涯

—新資料による—

後藤 純郎

1. 市川清流の出生地と少年期の学習

明治5年（1872）、文部卿に書籍院建設の儀と題する献白書を奉った市川清流について、私はかつて2編の論文と1編の追補を書いた。しかしその出生地や、青少年時代の生活、学習については全く不明のままであった。そして今回『三重県立図書館紀要』（創刊号、1996）に郷土出身の知名人のひとりとして紹介されているとの御教示を受けた。

『紀要』の典拠は主として『磯部郷土史』（同刊行会編・刊、1963）であった。同誌で確認できることは次の諸点である。

市川清流は文政5年（1822）、伊勢国度会郡神原村山原の農業、清兵衛とおうめ夫婦の長男として生れた。現在の三重県志摩郡磯部町山原にあたる。生年については、明治5年（1872）には満49才（但し、誕生日以前）で、大政官正院翻訳局の職員録の記載と一致する。

前記『郷土史』は、同村内の正伝寺の著名な高僧に和漢の学の手ほどきを受けたとするが、正伝寺には裏づける記録はない。しかし当時の農村の青少年たちが上京して学問をする道は、仏道修業のために郷里の末寺から本山に送られるという可能性がもっとも高いことは事実であろう。

2. 『幕末風聞探索書』に見える岩瀬家用人の清流

次に清流の名があらわれるのは『井伊家史料・幕末風聞探索書』の中巻にあたる安政6年編（雄山閣、1967）のなかである。岩瀬忠震は前年1858年に外国奉行から御作事奉行に左遷されたばかりであった。清流は同家の3人の用人のうちのひとりであった。徒（かち）目付から探索の結果を井伊大老へ報告したもので、そのなか

で用人の市川渡については「筆下には候得共用弁宜敷、肥後守気に入のよし」とあり、主君が高額的美術品を売却する場合などの用事を担当したと報告されている。

3. 岩瀬家の家刻本『地理全志』と清流

徒目付が見張りをしている頃、岩瀬忠震は『地理全志』を入手し、これを個人で出版し、幕府の首脳部に配布し、彼自身の主張する開国論を強化しようとした。同書については井坂清信氏の「国立国会図書館所蔵の和刻本漢籍概観」（『参考書誌研究』第43号、1993）の末尾に近い家刻本の項で例に挙げているものである。『全志』は当時中国の上海で活躍していた英国人宣教師W. ミュアヘッド（中国名、慕維廉）が中国語で書いた世界地理の概説書で、1853年と翌年に上海の墨海書館から金属活字本として出版されたものであった。

岩瀬はさらにこの版木をそのまま山城屋佐兵衛に渡して印刷、市販させた。英国図書館所蔵の清流自筆の『尾蛄欧行漫録』に見られる特徴ある異体文字、たとえば「所」という字の異体文字がこの版本に数多く見られる。版下書きを作成したのは用人の市川渡だったのである。

4. 市川清流の最期

清流の最期については明治12年（1879）説と11年説がある。彼は晩年、銀座3丁目22番地に住んでいた。現在の3丁目4番にあたる。妻子については記録がないが、同所には妹の千代が同居していた。千代の戸籍謄本に、前戸主清流が12年10月11日に死亡したので同日戸主となり、伊勢国山原村に帰郷したとある。駒込吉祥寺に葬られたというが、現在吉祥寺には記録も墓石も残っていないという。

馬場俊明「集書院の落成時期についての一考察」（『図書館文化史研究』第14号）をめぐって

山口源治郎

（東京学芸大学）

《以下の小論は、第2回例会での報告とそこでの議論を踏まえ、上記馬場論文についてあらためて検討した結果であり、当日の報告と若干異なる内容のものである。》

馬場氏のこの論稿は、明治初期の集書院の歴史的評価、落成時期、閉院の要因について再検討しようとするものである。特に落成時期について、先行研究が依拠する史料を検討し、集書院の落成時期に関する新たな説を提起している。

馬場氏によれば、これまでの集書院研究ではそのほとんどが、正院および大蔵省に提出された「集書院建造之御届」の日付（明治5年9月29日）をもって、集書院「落成」ないし「竣工」の時期としてきた。ところが集書院が「開院」するのは翌明治6年5月15日（新暦）である。そこで馬場氏は、「落成」から「開院」までの約6ヶ月間という「謎の空白」に着目し、「集書院の落成時期は、はたして明治5年9月29日でもいいのだろうか」と疑問を投げかける。

馬場氏は、明治5年9月29日「落成」説の根拠史料となっている「集書院建造之

御届」の内容を再度検討し、この史料の内容は集書院の「落成」を示すものではなく、「建築工事の準備が調った」ということを述べているのであって、そもそも「落成」あるいは「竣工」の文字すら史料には見あたらないと結論づける。またこのことに関連して、『文部省第三年報』（明治10年）が、「明治六年ヨリ着手同年五月一五日……建営開業シ集書院ト号セリ」としており、明治5年9月29日には建物の「落成」どころか「着手」さえなされていなかった可能性があるとしている。さらに、明治5年9月29日に「落成」していたとするなら、村上勘兵衛らの集書会社の閉鎖と集書院事務の委託を願い出た「乍恐奉願上候」（明治6年5月2日）も、先の「集書院建造之御届」から相当の日時を経ており不自然である。

馬場氏はこうした史料の再検討から、「落成したのは、明治6年1月以降開院に限りなく近い5月初旬までの間であり、この日をもって成立と考えるべきである」と、集書院落成時期に関する新説を提示し、あわせて、これまでの図書館史研究の史料批判の弱さ、先行研究への安易な寄りかかり、集書院への関心の薄さを指摘した。

集書院の「落成」についての馬場氏の考証は、従来の説（明治5年9月29日説）を疑わしむるという点において新鮮である。その意味でこれまでの図書館史研究の史料批判の弱さ、先行研究への安易な寄りかかりへの警鐘として傾聴に値する。しかし、「落成したのは、明治6年1月以降開院に限りなく近い5月初旬までの間であり、この日をもって成立と考えるべきである」とする馬場説も、それを裏付ける決定的史料が提示されていない限りにおいて未だ「仮説」である。通説の「落成」と「開院」に半年の期間があるとしても、落成と開院の間に特別な事情があれば大きなズレも可能性としてある。したがって今後『文部省第三年報』に「明治六年ヨリ着手同年五月一五日……建営開業」と記述されていることを、京都府の史料あるいは他の史料で裏付け、「落成」時期を限定してゆく必要がある。

他方、馬場氏は「落成」「竣工」に関しては大変厳密に考証されているが、集書院の「設置」「設立」時期についてはほとんど検討されていない。馬場氏の論稿が「落成」時期の検討を目的にしている点では無い物ねだりの誹りを受けるかも知れないが、図書館史的には集書院がいつ「設置」され、いつ「開館」したのかの方がむしろ重要な意味を持つ。

馬場氏はあまりに「落成」にこだわったためか、先行研究の一つに挙げた裏田武夫・小川剛の「明治・大正期公共図書館研究序説」（注）が、明治5年9月29日に集書院が「設置」されたと述べているにもかかわらず、それを「落成」ととらえている。また草野正名が「明治6年5月発足の……集書院」としたことをとらえ、「明治5年9月設立に与していない」（下線山口）と指摘している。ここでは意図的にか不注意のためか「設置」「発足」「設立」という用語と「落成」が混同されている。

「『落成』とは『建築工事、土木工事などが完了すること』を指す」（馬場）とすれば、「設置」「設立」とは明らかに異なる概念である。「落成」は物体としての建築物の完成がなければあり得ないが、「設置」「設立」は、集書院という組織を整え、そうした機関を設立する意思を法的に示すことである。言い換えれば建物がなくとも「設置」「設立」はなされるのである。この点今後の課題として研究の進展を期待したい。なお、集書院の設立と廃止をめぐる歴史的事情については、落

成時期をめぐる考証とはうって変わって推測的、短絡的であり、やや慎重さに欠けるように思われる。

(注) 『東京大学教育学部紀要』第8巻、1965年9月。

事務局からのお知らせ

1. 次期事務局の移行について

昨年の第14回研究集会・総会については、『ニューズレター』第62号(97年11月)でご報告しました。その中で事務局からの報告として、97年度末(98年3月31日)をもって、研究会役員任期が満了することを説明し、次期事務局について、自薦、他薦を含め出席者のご意見を伺いました。その際、研究会が全国的な性格を持っていること、関東・東京地区が3期続いていること(図書館情報大学、東京学芸大学、国立国会図書館)、会員の所在地から見ると関東以外では関西地区が望ましいこと、等を説明しました。大方の理解は得られたようですが、結局、現事務局一任となった次第です。

その後、関西地区の石井敬三運営委員、川崎良孝氏等とも協議した結果、1999～2000年度(1999年4月～2001年3月)については、関西地区で担当するよう努力するので、98年度は現事務局で善処してほしい、との回答を得ました。そこで、昨年12月21日の研究例会後の運営委員会で議論し、その結果、99年度以降の確約が得られるのであれば、暫定措置として現在の事務局、役員体制で対応するしかない、との結論になりました。その間、関西地区の事務局体制の整備をお願いする次第です。関係する会員の皆さまのご協力をお願いします。

2. 1998年度研究集会・総会

日時：1998年9月中旬の2日間(予定)

場所：未定(京都大学を中心に調整中)

運営事務局：川崎良孝、田口瑛子、深井耀子の各氏

秋の研究集会で発表を希望される方は、テーマその他の検討をご準備ください。開催内容の詳細は、次号のニューズレター(5月中旬発行予定)でお知らせします。

上記2件について、3月の運営委員会で協議する予定です。会員の皆さまのご意見を事務局までお寄せください。(事務局)

原稿募集

- ◇ 『図書館文化史研究』15号（1998年9月刊行予定）の原稿を募集します。原稿の締切は98年3月末日です。投稿を予定される方は、下記までご一報下さい。折り返し「投稿規定・執筆要項」をお送りします。

問合わせ、並びに原稿の送付先

小黒 浩司

- ◇ 「ニューズレター」の原稿も募集しています。研究に関する情報、書評なんでも結構です。（できるだけワープロで、MS-DOS標準テキストの原稿を）事務局あてお送りください。

会員名簿訂正

1997年度第5回運営委員会のお知らせ

下記のとおり運営委員会を開催いたします。

記

日時：3月22日（日） 3時～4時（研究例会終了後の予定）

場所：研究例会の会場に同じ

研究例会のお知らせ（関東地区）

◇1997年度第3回

日時：1998年3月22日（日）午後1時～3時（予定）

場所：法政大学 92年館（大学院） 7F 704教室

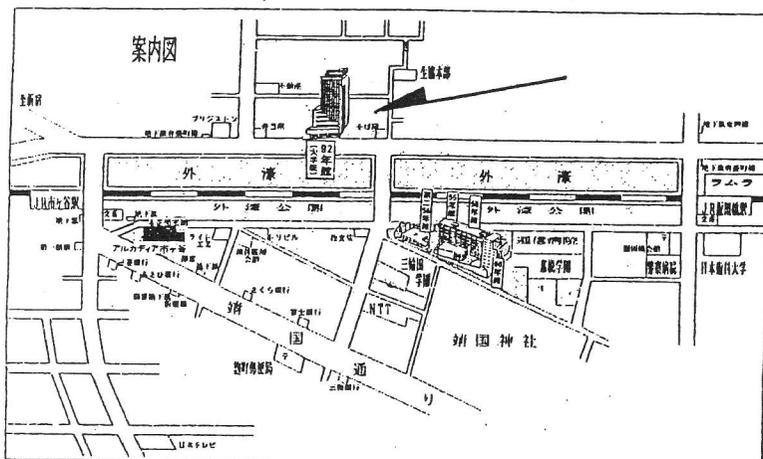
発表：米井勝一郎：満州の楠田五郎太について

山口源治郎：『図書館学資料集成（図書館史編）』の編集を終えて

今後の予定

◇1998年度 第1回 1998年6月20日（土）

* 例会の発表者を募集しています。質疑を含めて40分程度です。中間報告的なもの、情報交流（提供）などでも結構です。申し込みは事務局まで。



事務局から

1997年度（1997年4月～98年3月）の会費（3,000円）の納入状況は、98年2月末現在で、現会員132名中、31名の方が未納です（23%）。未納の方には念のため「振替用紙」を同封しました。よろしくお願いたします。

日本図書館文化史研究会 事務局 中林隆明